１学期始業式講話

改めて、おはようございます。

春休みもあっという間に終わり、令和６年度の新学期を迎えました。年度末の終業式にお伝えしたように春休みの間に本年度の目標を立てられたでしょうか。新３年、新２年となった自覚を是非もってほしいと思います。

さて、校長講話についですが、皆さんは試合等で三島、熱海間の長いトンネルを知っていますか。今から１００年前の話になります。正確に言えば１０３年前ですが、この頃丹那トンネル工事が行われてトンネルが掘られていました。ＪＲで三島、函南と熱海を結ぶトンネルですが、それまでは吉原駅から沼津、裾野を通って御殿場を経由して国府津、小田原と繋がっていました。これですと大変時間がかかるわけです。そこで熱海と函南口からトンネルを掘ることになったわけです。まだこの当時は富士駅ができたばかりで、吉原駅も鈴川駅と呼ばれていました。大変な難工事だったと言われ、熱海口に亡くなられた方の碑があって、６７人の名が刻まれています。実際は１００人以上が犠牲になったようです。

実は１００年ほど前の４月１日、工事中に突然トンネルが崩壊しました。落盤事故で、中には１７人が閉じ込められました。あたりはランタンがありますが、ほぼ暗闇です。皆さんだったらどうしますか。少し考えてみてください。

まず脱出口ですが、土と岩戸でふさがっています。次に食糧でしょう。ほんのわずかしか手元にはありません。他にはつるはしやスコップぐらいでしょか。

普通、大きな災害、例えば先日の台湾の地震や正月の能登半島の地震で、生き埋めになった人たちの生存率は７２時間、つまり３日間と言われています。７２時間を過ぎると急激に生存率が下がると言われています。

洞窟に閉じ込められたら皆さん、何をしますか。水はありました。泥水です。それをすすって飲みました。食べ物は２日目からありません。江戸時代に旅人が履いたわらじがありました。このわらじを噛んで、そして食べたそうです。それでも３日間が限界でしょう。

８日後、閉じ込められた１７人は奇跡的に救助されます。どうして８日間生きながらえることができたでしょう。

それは一人のリーダーの存在が大きかったです。まずは声掛けで、一人一人に頑張るよう声を掛け、励ましました。だんだん衰弱してくると話す体力もなくなるのですが、一人一人に最後の思いを話すようさせました。自分が後悔していることや伝えたいことを言わせて、この世に未練が残らないようにさせました。

さらに、外部からの救出のために、鉄管で音を出して信号とさせました。暗闇の洞窟から音を出していれば誰かが聞いてくれると思ったからです。これを定期的に交替制で行いました。この音は結果的には外部の人たちへの生存の合図となりました。閉じ込められて８日後、ついに彼らは救出されます。もう１日遅れたら死んでいたかもしれない極限状態の中、リーダーは最後まで仲間への声掛けを続けました。

救助隊に保護され、いきなり明るい所へ出ると目がやられますので、手拭いで目隠しをして、そして彼らは生きて帰ることができました。生きることが精一杯で自分のことでしか考えられず、ましてや他人に対しては余裕もない中で、そのリーダーの存在が仲間を救うことができたのです。

明日からいよいよインターハイ予選が始まります。テニスがその先陣を切りますが、野球やサッカーといった団体スポーツなら、なおさらこのトンネル工事で閉じ込められたリーダーのような存在は貴重だと思います。苦しい時の言葉掛け、これはチームを救うことになると思います。

この話は実話で、亡くなられた吉村昭さんが書かれた『闇を裂く道』にあります。読んでみるといいと思います。なお、この吉村昭さんの菩提寺が本校下に位置している長岳寺です。

以上で校長講話とします。　　（令和６年４月５日、始業式）